

# 関西学院大学 研究成果報告

2019年 3月 15日

関西学院大学 学長殿

所属：理工学研究科  
職名：博士研究員  
氏名：片平 建史

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input checked="" type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	感性評価の個人差とその基盤となる個人特性の解明
研究実施場所	関西学院大学理工学研究科 感性価値創造研究センター
研究期間	2018年 4月 1日 ～ 2019年 3月 31日 ( 12ヶ月)

## ◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

### 【研究の概要】

今年度は、人の感性的な反応の個人差を研究テーマとし、感性の個人差のモデル化手法についての研究（研究①）と、感性的反応の個人差に関連する個人特性（性格特性）についての研究（研究②）に従事した。

#### ● 研究①：SD法を用いた感性の測定における評価の階層性

従来の感性評価に用いられているOsgoodの情緒的意味の基本3因子のうち、評価性因子が持つ多義性の問題に着目し、階層的なモデル化とともに、階層構造の違いによる個人差の表現手法を提案した。階層的なモデル化においては、従来の評価性因子における評価対象の性質を記述する側面（記述的評価性）と、評価者対象物に抱く評価的態度（評価的評価性）の混在を指摘して両者を分離し、記述的評価性が他の2つの因子、活動性と力量性とともに関与するモデルを仮定した。

研究では、記述的評価性、活動性、力量性の評価語対を用いて抽象的・具体的な3次元形状の「印象」を評価する実験（実験1：関西学院大学学生12名）と、評価的評価性を構成する評価語対で同じ刺激への「価値」を評価する実験（実験2：実験1の参加者から8名）を実施した。分析では、実験1の結果から均整性、活動性、力量性と解釈できる3つの印象の因子を抽出し、実験2の結果から一般的好感の1因子を抽出した。次に、これらの因子について得られた因子得点

を用いて、3つの印象の因子が一般的好感を説明するモデルをパス解析によって検討したところ、抽象的・具体的という刺激の特性の違いや評価者の個人の違いによって、一般的好感に影響を及ぼす印象因子が異なる様子を捉えることができた。

以上の結果は、感性評価のモデル化において、評価対象の性質の記述と評価者が対象物に抱く態度を区別して取り扱うことの重要性を示唆するものであった。また、本研究が提案する階層的なモデル化が個人の感性評価の特徴の記述に有効である可能性を示した。本研究内容に基づいて研究論文を執筆し、2018年7月に日本感性工学会論文誌において原著論文として刊行した。

● 研究②：フロー体験に促進的・抑制的に関連する個人特性

ある活動に全人的に従事する際に経験される主観的状态であり、動機づけの促進や技能の発達に重要な役割を持つと考えられているフロー体験について、フローを体験しやすい個人の特徴を明らかにする研究を行った。本研究では特に、フローの体験しやすさに関連すると報告されているbig five性格特性の影響を日本の参加者集団で調べることと、フローを阻害する可能性のある要因として、公的・私的自意識がフロー体験に及ぼす影響を調べ、全体的なフローやフローのいくつかの側面と関連する個人変数を明らかにした。研究の詳細を以下に記載する。

本研究では121名の日本の成人男女に対して質問紙法による調査を行った。参加者は身体的活動におけるフローの体験しやすさを測定するLong Dispositional Flow Scale - Physical (DFS-2-Physical)の日本語版、big five性格特性尺度であるNEO-FFI日本語版、日本語版自意識尺度に回答した。質問紙への回答に不備のあった参加者を除き、最終的に87名が分析の対象となった。分析では、big fiveの5つのドメインと、公的・私的の自己意識の得点を算出して説明変数とする重回帰分析を実施した。目的変数はDFS-2の総合得点とフローの9次元の得点であり、それぞれについて別々の分析を実施した。

重回帰分析の結果より、DFS-2の総合得点に対しては経験への開放性が有意な、誠実性が有意な傾向で正の関連性を示した（前者については $\beta = .27$ 、後者については $\beta = .21$ ）。先行研究で負の影響が報告された神経症傾向については有意な関連性を示さなかった。フローの9次元に見られた有意な関連性は以下の通りであった。

- ・ 行為と意識の融合の次元（経験への開放性 [ $\beta = .23$ ;  $p = .056$ ]
- ・ 明確な目標の次元（経験への開放性 [ $\beta = .25$ ;  $p = .036$ ]、誠実性 [ $\beta = .33$ ;  $p = .007$ ]
- ・ 明確なフィードバックの次元（誠実性 [ $\beta = .25$ ;  $p = .042$ ]
- ・ 完全な集中の次元（経験への開放性 [ $\beta = .27$ ;  $p = .027$ ]
- ・ コントロールの感覚の次元（誠実性 [ $\beta = .20$ ;  $p = .099$ ]
- ・ 自己意識の消失の次元（公的自意識 [ $\beta = -.27$ ;  $p = .052$ ]
- ・ 時間間隔の変容の次元（公的自意識 [ $\beta = .23$ ;  $p = .099$ ]、私的自意識 [ $\beta = -.24$ ;  $p = .076$ ]、経験への開放性 [ $\beta = .38$ ;  $p = .002$ ]、誠実性 [ $\beta = .25$ ;  $p = .035$ ])。

big five性格特性に関して、先行研究では神経症傾向の抑制的な関連性と誠実性の促進的な関連性が報告されており、本研究の結果はこれと部分的に一致していた。また、本研究では公的・私的自意識がフロー体験に抑制的に関連することを新たに明らかにした。フロー特性とこれらの個人変数の関連性についての知見は、実験的研究においてフロー状態の喚起精度を向上させるための参加者のスクリーニングや、フロー体験を増進する応用的手法の開発に寄与すると期待される。本研究内容に基づき、2019年3月にパリで開催された心理学の国際会議ICPS2019で発表を行った。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。